

小松沢レジャー農園

～1年を通じて楽しめる味覚狩りと豊富な体験プログラムを提供～

ぶどう狩り、いちご狩りといえば、老若男女が季節ごとに一緒に楽しめる日帰りレジャーの人気ジャンル。季節限定の施設が多いなか、ここは四季折々の味覚、遊びが一年中楽しめ、年間6万人が訪れる体験型総合レジャー施設となっている。

秩父の山々に囲まれた3ヘクタールの敷地。一見、のどかな農村風景のなかに、ブドウ棚やイチゴ、シイタケのビニールハウスが並び、周囲の畑や山林にはさつまいも、じゃがいも掘り、昆虫採集が体験できるスペース。中心部には食堂、バーベキューガーデン、そば、うどん打ち体験農房などの施設が整えられている。家族連れや団体が一日を楽しく、ゆったりと過ごせる施設づくりだ。

同様施設との大きな違いは、16種類を数える豊富な体験メニューと、1年を通じて季節の味覚狩りができること。味覚狩りを含めた体験メニューは、季節に応じて複数選択できるよう工夫されている。「体験プログラムを選ぶ楽しみ、組み合わせを考えて遊ぶ楽しさを提供して、1日過ごせるようにし、リピーターになってもらいたい」。町田裕専務は、こうしたコンセ



ぶどう狩りを楽しむ子どもたち



小松沢レジャー農園のエントランス

プトを打ち出した理由をそう語る。

レジャー農園を始めるきっかけは42年ほど前、町田恒夫社長が農産物の直売方式を周囲に呼びかけ、札所めぐりの観光客を対象に試みたこと。初めはネギやトマトといった地場産の野菜だったが、ブドウ、モモの栽培やビニールハウス導入で徐々に品目を増やした。

レジャー農園としての本格的な第一歩は1971（昭和46）年、ぶどう狩りに一本化してスタート。当初秋のみの開園としたのは収益性を考えてのことだった。1975（昭和50）年からは食事の提供を開始。この間、他品目の栽培技術向上に努め、1977（昭和52）年にいちご狩りも始めた。さらに自然豊かな立地環境を生かした昆虫採集、マスつり池、溪流でのマスのつかみ取りといった子どもたちが楽しめる体験ものを加えていった。こうした努力が実り1989（平成元）年、JA全中などが定める日本農業賞に本県代表として推薦され、個人部門優秀賞を受賞。レジャー農園として大きく前進する弾みをつけることとなる。

常に新しい試みに挑戦しようとする社長の気概が、次々とアイデアを生み、周りの農家

と提携しながら事業拡大を図った。屋外、団体で楽しめるよう常に新たな体験メニューを考え、2005（平成17）年から調理師を講師に迎え、うどんとそば打ち教室を開始。2010（平成22）年にはピザ焼きをスタートさせ、さらに多彩な選択肢を用意した。味覚の幅を広げ、若者や洋風味覚の家族連れにも魅力を感じてもらおう作戦だ。

運営面で力を注いでいるのは、清潔さと環境美化。「農業は土に絡むので汚れるとの印象があったため、気をつけている」と、町田専務。そのためタイル平板などを敷いて園路を整備、トイレの清掃にも気を遣っている。

社長の目標は「ユートピアファーム」をつくること。「単に農産物の直売を目的とした観光農園ではなく、心身ともにリフレッシュできる施設」づくりを目指している。周囲の敷地では20年ほど前から「千本モミジ山」構想を推進し、モミジのほかミツバツツジ、サツキ、フジなどを植栽。ハイキング道や休憩所となるハンモックハウスも整備している。農園エントランスは、春から秋にベゴニア、冬はビオラを中心に約4,000本の花が植えられ、来園客を迎える。

一方、イチゴ、ブドウ、シイタケの主力農



ブドウ棚の下に設けられたバーベキューガーデン

産物は、とりわけ安全・安心な生産技術を徹底し、生産性の向上にも力を注いでいる。

今後はさらに「自然とのふれあいを基盤にしたオンリーワン」を目指し、体験メニューを改良、顧客満足度の向上を図る計画だ。

夏休みなどの長期休暇、祝祭日を中心ににぎわい、時季によっては幼稚園、小学校の遠足をはじめ、提携旅行会社のツアー客が訪れる。多いときは1日1,000人を超える来園者が詰めかける。入園、駐車場は無料。西武秩父線横瀬駅との間を3台の無料送迎バス（要電話）が結び、サービスも徹底している。

企業概要

- 会社名 有限会社小松沢レジャー農園
- 代表者 町田 恒夫
- 設立 1990年
- 資本金 500万円
- 従業員 パートを含め46人
- 事業内容 ぶどう狩りなど体験型総合レジャー施設
- 本社 秩父郡横瀬町大字横瀬1408
- 電話番号 0494-24-0412 FAX 0494-24-4534
- 取引店 横瀬支店



町田 恒夫社長